かもしれない。

山本結城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かもしれない。

【Ｎコード】
Ｎ３２３７Ｌ

【作者名】
山本結城

【あらすじ】
彼を変えたのはひとりの同級生だった。風変りな谷口は周りに勘違いされ、いつのまにやら悪者だった。一方の大浦は周りが羨むいい子の代表で、カッコイイ男の子だった。あの日ふたりが出会ったのは偶然だったのかは分からない。その日まで挨拶すら交わしたことのないふたりなのだから。

プロローグ

俺は小学生のときから、いわゆる人気者と言われる部類の人間だった。教師からの信望も厚く、立っていても座っていても人が集まってきた。俺が教室に入ると既に自分の席には人だかりができているのが常だった。クラスメイトたちは毎日飽きることなく群がる。その中に居る俺は笑顔を振り撒きながらも、心の中では冷めた目で眺めていた。

面白くもない話に笑い、なんとも思わない出来事に可哀想だと涙して、そんな偽物の心に気付くことなく周りの人間は俺を好きだと言う。俺はそんな皆を哀れに思っているのに。

そんな俺だが、入学してから数年はなかなか上手く笑うことができなくて苦しむ日々が続いていた。どんなにしても作り物に見えているんじゃないかと思って怖かった。しかしある日、保健室の先生に言われた言葉で俺は理解した。

「本当によく笑うね。直君の笑顔は太陽みたいで周りが明るくなるわ」

不自然な笑いしか出来ていないと思っていたのは自分ひとりだったということだ。俺は一度でも心から笑ったことがあっただろうか。

中学校に上がってもこの性格は変わらなかった。それどころか酷

くなっていた。

周りのクラスメイトたちが初めての期末テストの順位で騒いでいる中、俺は平均点を下回った一教科のことだけを考えていた。俺が唯一苦手と感じていたのは体を動かすことだった。

それは置いておくとして、学年のトップになったことで自らのやり方が間違っていないという証明にはなった。授業中の俺は真面目なふりをしていたが教師の顔を見るたび同じことを思い浮べて時間をつぶし、学校での勉強は勉強にはならなかった。

どういうわけかテストでは常に3位以内をキープして、学校や近所でははは優秀な生徒で通っていた。その上、生徒の間では人気が上がるばかりで学校にいる間はひとりになることがなかった。

近所での評判も、同級生の親たちのおかげもあってか上がる一方だ。

ただ上級生からの視線は少し怖かったのを覚えている。特に三年生は俺は嫌っていたようで突き刺すような視線には驚いた。こんな俺を妬むのは間違っていると言いたくもなったが、そんな上級生にだけはいつも以上の笑顔を見せた。

そうしているうちに向こうは俺を妬むにも妬めなくなっていくのだ。

俺を嫌って、手を出してきたやつは一発アウト。俺のKO勝ち。教師は俺の味方だ。どうにも後味の悪いものが多かった。

俺がいじめられていたのかどうかは別として、イジメはよくあることだった。俺のクラス内にもイジメの標的はいて、その子は毎日

顔面蒼白で登校し、泣きながら学校をあとにしていた。それでも俺はどちらにも荷担しなかった。かわいそうだと思うことはあってもそれはいじめる側に対しても抱いていた思いで、どうにも関わる気になれなかった。周りの同級生も、面倒なことに関わりたくないという思いがあって見て見ぬふりを続ける者ばかりだった。そんなことを半年もやっていれば自然とイジメは沈静化していく。しかし半年を過ぎてもピークから落ちないイジメがあると生徒間で話題になり、ある者はイジメのリーダーにやめるよう説得をしたり、ある者は数名で連れだって教師に訴えかけたりし始める。そのトドメに俺が教師に話をすれば一件落着。そんな感じだ。

中学に上がってからは何かと面倒なことが多くなっていた。
同級生の明るい女の子グループは俺のいるグループに入り込むことはなくても、その輪の外で奇声を上げてこちらの様子をチラチラと伺う。どうしようもない騒ぎようで、あれはまさしく動物園の猿のようだった。そうでなければ、俺が檻に入れられた動物のような気分である。

それから時は流れて中学三年、卒業式当日の教室はいつも以上に騒がしくて居心地が悪かった。卒業式のひと月ほど前から、俺は少し遅めに家を出るようにしていた。少しでもあの喧騒の中にいる時間を短くしたくてゆっくり学校への道を歩く。
いつも道を占拠しているオバサン達はいないし、気は楽だった。
卒業式当日もゆっくり歩いていた俺は学校に着き、ふと時計を見

ると遅刻していることに気がついた。式は午前九時に始まると卒業式のしおりには書かれている。よほどのことがない限り時間は厳守されるだろうが、答辞を読む卒業生代表になっていた俺が来ていないとなると、３０分や一時間の遅れはあったと考えられる。しかし校内の様子から式は始まったのだとわかった。

それにしても不思議な感覚だった。いくら遅く歩いたといっても今時計の短針は１０を指しているのだ。家を出たのは八時を過ぎた頃だったと思う。ここに来るまでの間――二時間もの長い間だ――自分は一体何をしていたのか頭の中はすっからかんだ。

下駄箱で靴を履き替えると体育館とは反対方向に足を向けた。迷わず屋上への階段に足をかける。校内はいつもの、ただ人がいないときの静けさとは違っていて、建物にも大切なときがわかるんだろうかとそんなことを考えた。

キンと張り詰めた空気の中をひとりで歩みを進める間、頭の中では大変なことをしたかもしれないと思った。しかしそれはすぐに消えて体は軽くなっていった。

肩に掛けた大きめのカバンを重く感じるのは、着替えや貯金通帳や印鑑、銀行で下ろしてきた十万単位の現金、履歴書、あとは細々とした――要するに持っていれば生活に困らないような物を選んで詰め込んでいたからだ。

テストの結果や教師によって露にされた俺の運動神経は酷いものだった。数字が頭に浮かぶ。知識はあっても実技となると下から何番目というところ。体育の評価が低い者といえば、太っていたり知的障がい者だったりが常だった。あとは俺のような運動オンチかやる気のないやつ。

体育の授業や体育祭を思い出しながら若干気分が悪くなる。カバ

ンの重みでふらつきながら、一度立ち止まって左肩からずり落ちそうになったカバンを右肩に掛けなおした。
バランスを崩さないようにまた屋上に一歩近づく。屋上の扉の前で肩からカバンを下ろし息をつく。

扉を開けようと手を伸ばして張り紙があるのに気付いた。よくありそうな立ち入り禁止の文字。あの短くて太い油性マジックで書かれたんだろうか。いつ書かれたのか紙は端が切れ切れで黄ばんでいるし、文字も擦れてしまっている。なぜかその紙や文字がおかしくなって俺は笑っていた。口元が緩むのが分かる。張り紙を指でなぞってドアノブを握った。力を入れて右に回す。耳障りな音がしてドアノブが回った。

鍵は掛かっていなかった。

音をたてる重い扉を押して屋上に出る。外に出るともちろん誰も居なくて静かだった。車の走る音や近くの小学校から聞こえる子供の高い声。三月の暖かさが心地よくて、扉から死角になる適当な場所を選びカバンを枕にして寝転んだ。

カバンは柔らかいところと当たると痛いところがある。詰め込んだから無理はない。衣類の入った柔らかい部分が頭の下になるように調整して一息ついた。

まっすぐ上を見ると空が近くて腕を伸ばすと太陽は俺の手の中に収まってしまった。両腕で目を隠すようにして息を吐き出して、鼻がツーンとした。

そのまま目をつぶっていると歌声が聞こえてきた。低い声が主張しすぎててとても綺麗とは言えない。女の子の声が押しつぶされて

いる。きっと泣いてるんだろうと思いながら意識は遠のいた。

◇　◇　◇

目覚めたのは地域の何かを知らせる放送のチャイムの音だった。犬の悲しそうな遠吠えが消えていく頃、固まった体をゆっくりと起こして大きなあくびと伸びをした。それから夕焼けを見て、雲が出ているからこれから雨かもしれない、と考えた。手で髪を梳と

かすと左の耳のすぐ上が跳ねているのに気付いた。そこを撫でながら何をするともなく座っていると校庭や体育館の方向から話し声が聞こえてきた。

寝すぎたと思ったのに、まさかまだ卒業式は終わっていないのだろうか。尻ポケットから携帯電話を取り出して電源を入れる。電源を切った覚えはなかったが切れていたのだ。待ち受け画面には着信があったことを知らせるアイコンが激しく主張していたが、気にせず時間を確認すると午後五時を回ったころだった。遅くても昼には式が終わっただろう。人が居てもおかしくないが、人の数が多いのが気になった。

這うように体育館側のフェンスに寄って言葉を聞き取ろうとして聞こえるわけがないと苦笑するが、そんな思いに反して言葉は入ってきた。思った以上に声が大きくて焦りの色が強いのが分かった。一際声を荒げているのは担任だ。会話の中に俺の名前が何度も聞こえる。

どうやら話題の中心は俺らしい。

ため息をつきながらカバンを取ろうとさっきまで寝転んでいた場所を振り向いて異変に気付いた。目的の物が見当たらない。

周りを見渡してもどこにも落ちていない。

屋上一面は冷たい灰色のコンクリートで広々としていて――とは言ってもたかが屋上だが。しかし視界を邪魔するものはない。ただコンクリートの塊があったり、空調機器が群れていたり、唯一と思われる出入り口の横に小さな錆びた梯子(はしご)が掛かっていて上れるようになっているくらいだった。

そうだ、迷わずそこに駆け寄った。

その1

数段の梯子を上って見つけたのは、想像もしていなかった、人だった。

驚いて足を踏み外しそうになって声を出してから、しまった！と思った。その声は本当に小さかったが、ウトウトと微睡(まどろ)んでいた彼に自分の存在を気付かせるには十分な音量だったようだ。

少しの間を置いてソイツは起き上った。俺は動けなかった。

夕日が眩しいのか目を細めたソイツと目が合う。どうすることも出来ずにお互い無言のまま俺は梯子を下りた。意を決してもう一度梯子に足をかけて体重を乗せる。同時に上から降ってきたソイツは軽々と俺の隣に着地した。ソイツが手に持っているのは確かに俺のカバンだった。

「あの、それ僕のなんだけど。返してくれる？」

返せ、と強気には言えなかったのだ。返事はなく無言だった。差し出されたカバンを受け取りながら少し見上げてソイツの頭を見る。

「谷口君だったっけ」

俺はわずかに口角を上げた。何も言わないソイツと目が合う。すぐに逸らされた視線の先を追うように見ると校門近くで落ち着きなく動き回る担任が目についた。右往左往と動き回り、顔色は遠目に見ても非常によろしくなかった。

「これ警察に言われてもおかしくねえかも」

ソイツはこちらを向いて言った。

どういう意味かと訊くと、手に持った携帯電話の画面を目の前に突き出してきた。それを読めという意志だと受け取り、おそるおそる手に取った。

その画面はメールの受信ボックスだった。送信者はカズキとある。

卒業式に来なかったから寂しかった、ということが書かれていて、読みすすめると話の内容は俺のことばかりだった。最後まで読んだところで唐突に肩を押された。されるがまま座ると携帯を取り上げられ、静かにするよう人差し指が立てられる。

「校長も居るし……マジ最悪。これ、読んだ？」

苦笑いになっただろうか。頷くとソイツは携帯電話を開けたり閉めたりして数秒考えるような顔をした。そして下にいる校長と担任を見て小さく舌打ちをした。

「これじゃしばらく下行けねえよ。あれ、お前が行方不明とかって探してんだぜ」

いかにも迷惑そうに顔をしかめて携帯電話をズボンのポケットに押し込んだ。それから気まずい沈黙がしばらく続いた。耐えられずに口を開く。

「ウザヤって誰のこと？　あだ名だよね」

「ウザヤが誰かってのはどうでもいいけど、お前って聞いてたよりアレだな」

アレとは何かと言いたいところを抑え、笑って流す。
イメージになかったわ、と鼻で笑ったソイツはそれ以上何も言わず、フェンス近くの薄汚れたセメントに背中を向けて眠り始めた。俺が居ることなんか気にしていないようだ。それを見ながら自分の携帯電話を確認すると、待ち受け画面には不在という文字とアイコン。ボタンを押すと目を疑う三桁の数字が目に飛び込んでくる。着信履歴にはズラズラと担任の名前が並んでいた。あいにく俺は留守電という機能を使っていなかったから担任もただ電話をかけ続けることしかできなかったのだろう。時間を見ると5分か3分間隔での着信が多く、長くても9分ほどだった。俺が電源を入れて時間を確認してから今までだ。さすがに式をしていたと思われる時間には一件も着信はない。しかしそのあとの勢いは凄まじかった。

そこまで考えて気付く。このまま電源を入れているといつ着信があるか分からないではないか。電源を落とし、カバンを肩にかけて屋上をあとにしようと足を踏み出したとき、不意に呼び止められた。

「帰るのかよ」
「帰るけど……だって山本先生とかが僕のこと探してるんでしょ？迷惑もかけたし、そのこと謝んなきゃ」

呆れたように空を仰ぐソイツにじゃあね、と声をかけ、改めて屋上をあとにしようとドアに向かう。後方からアイツがこちらに向かってくる気配を感じながらもドアノブに手をかける。その瞬間に肩を掴まれてカバンの重さも相まって後ろによろける。

「うわ」
「屋上に居たって言わねえって約束しろよ。お前正直に屋上とか言いそうじゃん。それ困るしマジで」

「別にいいじゃん。谷口君も卒業だし屋上に入れなくなっても問題ないと思うけど？」

話を聞くと、屋上が一部の生徒のたまり場になったのは十年近く前だと言う。それからは代々三年生の誰かが、受け継がれてきた鍵を持ち、卒業式の翌日に次代に継承する、というバカげたものだった。しかしそんな話を真面目に説明しているソイツがとてもかわいく思えた。

真剣な顔のソイツに圧（お）されて渋々ここに留まることにした。別段、急ぎの用事もないのだ。俺が帰らないと分かったソイツは眠りに戻った。俺もすることがないので朝のようにカバンを枕にして横になった。朝より幾分やわらかくなった光の中で目を閉じると緩やかに眠気がやってくる。

◇　◇　◇

視線を滑らせると寝ているソイツが気になった。

さっきまで気にも留めなかったが格好を見ると教師たちが最も嫌うものだった。髪型は周りの男子より長めなくらいなのに、どうしてか目を引くのはその色だった。明らかに染められた色なのに、それをとても綺麗に感じた。もう日が沈みかけた薄闇の下でその頭だけが浮かび上がって見える。着ているものを見れば制服ではなかった。履き古したようなジーンズにテロンとしたTシャツ。Tシャツは、この暗さのせいなのか何なのか変な色をしている。

俺もソイツの噂は何度か聞いたことがあった。その噂というのはありがちな誇張された物で信じるに値しなかったのを覚えているが、やんちゃの度を超えているヤツだというのは確かな話だった。とはいっても青春マンガによくある喧嘩の強いヤンキーとは全く無縁なんじゃないかとは思っていた。根拠はなかった。

いわゆる問題児と呼ばれて学校が手を焼いている相手だった。担任の山本先生はよく俺に愚痴をこぼしていたのだ。

耳には一体いくつあるのか見た限りではわからないほどの穴が開いて、風にそよぐ傷んだ髪はキラキラと光るピアスを気紛れに隠している。俺は自分の体を支えていた左手を伸ばして少し離れたところにいるソイツを手の中に握り込んだ。そしてゆっくりと手を開いたとき、その瞳に吸い込まれた。

真っ直ぐな力に引き寄せられているようで目を逸らすことができなかった。

「……なんか用？　そんなに見んなよ。キモい」

言われて目を泳がした俺にソイツは更に眉を寄せて、立ち上がりながら聞こえるかどうかの小さな声で再度キモいと言った。

首をめぐらせてフェンスの向こうを見ると数台の車が停められているのが見えた。それは眠る前と変わっていなかったが変わったのはその台数だった。全部で八台の車があった。見分けがついたのは俺の担任である山本の黒塗りのミニバン、校長の白いワンボックス、あとはその他の教師のものだった。

今ある車は山本と校長ともう一台の全部で三台。その他の教師は帰ったらしい。そこでその一台が問題だ。見慣れたシルバーの車は母親のものである。なぜ言い切れるのかと言うと、その車の隣に立っているのが母親だからだ。

「いつまで経っても先生たち帰るどころかお母さんまで呼んじゃって、僕帰るよ。今度こそね」

ソイツは仕方ないといった感じでドアへ向かった。急いで立ち上がって後を追う。よくわからないヤツだ。

ソイツが屋上へのドアに鍵をするのを見届けて階段を一段降りた。

「谷口君、いま何時？」

「知らね」

素っ気なく返された。前を行くソイツは左手首に腕時計を着けている。

「時計してんじゃん。見せてよ」

自分のケータイで確認しろと腕を払われ、諦めて携帯電話の電源を入れる。すると時間を確認する暇もなく、この小さな機械は震えた。俺の携帯電話は常にマナーモードに設定してある。知らせてくれるのはバイブの振動だけだ。

おそらく電話をかけている山本はコール音を聞いて喜んでいるだろう。いつまでも震え続けるのではないかと思うほどコールは続く。仕方なく通話ボタンを押した。そして今校内に居ることと、今すぐそこに行くということを伝えて一方的に電話を切った。

「……ったく、猫かぶりかよ」

暗くて静かな階段を一段一段降りていく。廊下を進み再び階段。ずっとその繰り返し。その間は会話なんてなかった。ふたりは無言で、ただ歩いていた。最後の階段が終わって、平坦な暗い廊下のつきあたりに来たとき唐突に降ってきた言葉がそれだった。

俺は何も言わずに下駄箱から靴を取り、外へ繋がるドアの鍵を開けた。ツマミを下にさげるとカチャリと大きな音が鳴る。外に出て脱いだ室内靴を用意していた紙袋に入れて左手に持った。そういえば山本たちはこの靴に気付かなかったのだろうか。

「先生に会ったら、ふたりで謝って、卒業証書……くれるかな？そうすればやっと帰れる。今日は寝すぎたよ」

「オレ謝る必要ねえだろ。誰にも迷惑かけてねえっつうの！」

辺りに引き戸を乱暴に閉める音が響いた。

この曲がり角を曲がれば山本や母親がいる正面玄関だというところでソイツに腕を掴まれた。ソイツの目は屋上のことが気がかりなんだと訴えかけている。そうとしか思えなかった。

「わかってる。屋上のことは言わないし適当に話しておくから。谷口君の名誉のために」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3237l/

かもしれない。

2010年10月14日12時57分発行